

2/11 ぐんま教育のつどい 2026



前橋市大手町 3-1-10

群馬高教組

027-231-2784

ghtu@educas.jp

http://www.ghtu.org/

テーマ「ぐんまの公立高校は、共学？別学？」

ぐんま教育のつどい2026が2月1日(建国記念の日)に県勤労福祉センター(前橋市野中町)で開催されました。「ぐんまの公立高校は、共学？別学？」をテーマに、ぐんま公立高校男女共学を実現する会(以下、ぐんま共学の会)代表、坂本祐子さんに講演いただき、会場参加者のみなさんと意見交流しました。全体の参加者は25名でした。以下、概要報告になります。

五つのテーマ

群馬の統廃合・共学化の歴史を振り返る

水田委員長の開会あいさつに続き、教文部長(萩原)からこれまでの統廃合・共学化と公立女学校創設、1948年の高校三原則などをパワポでざっと振り返りました。その後、1時間にわたり坂本代表から講演をいただき、途中休憩をはさみつつ、質問紙による質疑応答、さらには会場参加者の意見交流という流れで進行しました。

44ページ分のパワポ資料は4分割6枚の冊子にコンパクト化され、坂本さんご本人のプロフィールに続き、5つのテーマ(以下、①〜⑤)にまとめられていました。

- ①この1月で発足26周年を迎えたぐんま共学の会の活動内容では、設立に至るまでの経緯、県公式ツイッターや県知事ブログ、マスコミでも報道された山本県知事への要望書提出や平田教育長訪問などが語られました。
- ②共学化に関する群馬県の動向では、主に県教委の動きを中心に、2000年8月当初「2002年度から10年で」の推進計画・基本案が2001年には早くも「慎重に検討」と機運が後退したまま、現在の動きにながっている。公立高校別学数の近県比較では、埼玉12、群馬10、栃木8の順で並び、高校数に対する別学率では、群馬が16.4%で一番高い。
- ③大学・高校生の意識調査データは興味深く、県外出身者の目から見れば、「〇〇女子高出身」という自己紹介が奇異に映るケースや、多様性重視の時代に性別で分ける不自然さが浮かび上がりました。確かに「〇〇男子高校」という名称には、普段聞きなれない違和感を感じます。ほかに共学・別学をテーマにした博士論文も紹介されました。高崎高校新聞部が近隣3校に対して行ったアンケート調査結果からは、別学在校生は共学が自然と捉えている様子も伺えました。
- ④ジェンダー平等・教育では、「ジェンダーの縛り」「ジェンダーバイアス」からどう解放され、自由になるべきかという視点が語られました。これは単に共学・別学だから起こり得る問題というのではなく、個々が選択し所属したはずの集団・組織の中で「自分らしさ」をどうやって構築すべきかという共通課題です。性の多様性とも絡め講演後の意見交換でも多岐にわたる会場発言で広がりを見せました。



テンポよい語り口で講演する坂本さん(上)
共学化の歴史を振り返る萩原教文部長(左)



あいさつする水田委員長





⑤性別に関して公正な社会とは？「個人差は性差を超える」というタイトルで「その人らしく女であったり男であったりすること」が尊重される世の中を実現するためには？と問われたらみなさんならどう答えますか。社会を変えるためには制度・意識を変える必要がある。とすれば、人の意識よりも制度改革が先？これは共学・別学問題とも関わりながら、真のジェンダー平等を実現するために、何をすべきか、何ができるかが問われることとなります。共学化はあくまで出発点、次代を担う子供たちの視点に立って変化に対応する・できる社会を。

県議、高校現場、別学OG、元校長、義務制現場、フォーラム関係者など、様々な立場から発言

1時間ピッタリの講演内容で、15分の休憩中には7枚の質問紙が回収されました。別学が残る理由は？どんな運動が必要か？私学や国立大学での別学は？ジェンダー平等教育と進路指導の問題点は？別学のポジティブな効果は？先の衆院選で夫婦別姓に反対し家制度を大事にするところが議席を増やしたことについては？などなど。講演後の質問で毎回感じることですが、講師はどんな質問にも答えられるわけではありません。それでもその一つ一つに対し丁寧な回答をいただきました。

1時間弱の意見交換では、県議、高校現場、別学OG、元校長、義務制現場、フォーラム関係者など、様々な立場から発言してもらい、その都度関連する声を2本のマイクでつなぎながら、それぞれの意見が少しでもかみ合うよう進行しました。坂本さんは後日その様子を「会場のクロストークが大変充実していて」と表現しています。

リアル参加だからこそ実感できること

会場発言のやり取りはその場の雰囲気も含めて是非リアル参加で体感してほしいものです。LGBTQの視点から見れば、共学高校でもそれぞれの性が大事にされているとはいいたい現場の実態。50年ぶりに帰郷した別学OGからは他県意識。男女混合名簿という名称の違和感。別学で良かった体験。別学を白黒の人種問題に置き換えて初めて腑に落ちた感覚。現場の声を聴かず結論ありきの県教委の姿勢。性はグラデーションなどなど。一見かみ合いそうになく映る文字の羅列も、会場では有機的なつながりを持つような感覚がありました。



別学・共学という視点(窓)を通じてジェンダー問題の広がりを感じた

別学・共学の選択が学力次第というシステムは公教育にはそぐわないのでしょうか。それでも国立公立大学にはいまだ女子の枠組みが残っています。別学・共学のいずれを選んでも窮屈な思いをする生徒はいま。それは自らがいづれかの発達段階に応じて解決・克服すべき問題でもあります。今回扱った別学・共学という視点(窓)を通じてジェンダー問題の広がりを感じ、その一端を見直す機会が得られた集会でした。



高校シンポジウムin丸亀 (1/24~25)

いつもなら、全体会・分科会で交流した内容を記載・報告するが、今回は少し角度を変えて伝えたい。全体会、分科会後には夕食交流会がある。北海道・東北ブロックから南へ下り、最後はホストの開催地の順番であいさつする。北海道を皮切りに一人づつあいさつという流れで関東甲越は二番手だった。香川(丸亀)は何回目というあいさつが多く、自分もとっさにあいさつを組み立てる。「夏の盛りにロードレーサーを輪行しうどん屋をはしごしたが、あの頃はまだ若かった。今回は若手を連れてきました。」と武さんにながし、無難にこなしつつもりだった。後から少し思うところがあった。

シンポジウム終了後、バスの出発まで間があり駅まで歩くことにした。途中「太助燈籠200m」の案内板が目にとまりピンとくるものがあった。辿り着いた先は前日も通った小さな親水公園だった。丸亀うちわ創始者の瀬山登像が正面に建つ、すぐ左奥に高さ5.3mの青銅製の燈籠があった。石造りの土台には「江戸」「中講」の文字が刻まれている。「金毘羅講燈籠」が正式名称で、寄付額が一番多かった塩原太助の名に因んでいるようだ。実は、交流会スタートの乾杯あいさつでは香川ゆかりの偉人達に触れ、1947教育基本法制定時の東京大学総長、南原繁の言葉が引用される格調高いものだった。塩原太助が群馬県にゆかりのある人物と知る県外者はほとんどいないだろう。この話なら交流会の印象は変わっていたなど勿体ない気持ちがあった。それはお国自慢をしたかったからではなく、そこにつながりを感じるから。



今回シンポジウムに現地参加してくれた若手の武さんは、別の集会では何度かオンライン参加の実績がある。最初は細かったつながりを少しでも太くしようとはたらきかけてきた成果がそこにある。担任手当の導入に限らず「分断」を惧れる声をよく耳にする。そこをスタート地点に据える方が賢い気がする。ユニオンのユニ(uni)が意味する単体にはなれないし、実はそうなる必要はないのかもしれない。それでもつながりを広げ、強化することはできる。そんなことを感じたシンポジウムだった。

(萩原)

TANE! (青年教職員学習交流集会) in長野 (1/30~2/1)

「つながること、実践的に学ぶことの大切さ」

TANE!in長野に参加してきました。リモートでの参加経験はありますが、リアルでの参加は初になります。同僚を誘ったものの一人で参加することになりましたが、「何とかなるだろう」とふらっと参加した感があります。会場の第一印象は「若い!」。私自身、まだまだ若いつもりですが、年齢は30代半ば。職場では中堅です。それに対し、見るからに20代の先生が多く、さらに義務校や特別支援の方も多し、堅苦しくないフラットな挨拶や、自己紹介では一発芸を披露する方がいたり、2日目には朝の会と称してラジオ体操をしたりするなど、終始若さにあふれていました。

そして学習。平和学習がテーマの分会では、学年や学校・分会をまたぎ、保護者をも巻き込んだ大規模な教育実践を紹介され、思わぬ形で、個人でできる教育活動の限界と組合を含めた「つながることの大切さ」を痛感しました。また、講座や全体会では大学教授の講義や夜間定時制や自主夜間中学の事例を通して、インクルーシブ教育について学びました。本などを通して自分なりに学んでいるつもりではありますが、やはり実践紹介や専門家の話はまだ違う刺激となります。

帰りに寄った善光寺や上田市の古本屋も併せて、非常に濃い2日間の学びをすることができました。次回はどなたか一緒に参加しませんか?

(武)



